

10. 自律訓練法によって生じる不安反応のメカニズムに関する研究(平成17年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	古川 洋和
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	1
ページ	117-118
発行年	2005
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006785/

関連 QOL には影響を与えないものの、IAS-AD の得点は掻破行動の程度（患者群：.76, $p < .001$, 学生群：.77, $p < .001$ ）と時間（患者群：.77, $p < .001$, 学生群：.75, $p < .001$ ）に対して強く影響を与えていることが明らかになった。

〔まとめ〕

本研究の結果から、成人型 AD 患者は痒みに対する不安を抱えていることが明らかとなった。また、痒みに対する不安から掻破行動に影響を与えていることから、痒みに対する不安を治療対象とすることで、患者の不安と掻破行動が減少し症状の改善につながる事が考えられる。したがって、成人型 AD 患者の痒みに対する不安へのアプローチが必要であることが考えられる。

引用文献

Linnet, J., & Jemec, G. B. E. (1999). An assessment of anxiety and dermatology life quality in patients with atopic dermatitis. *British Journal of Dermatology*, 140, 268-272.

10. 自律訓練法によって生じる不安反応のメカニズムに関する研究

古川 洋和

〔目的〕自律訓練法（Autogenic Training：AT）は、セルフコントロールによるリラクセーション法であり、わが国においては心身医学的治療法の1つとして用いられてきた（佐々木・笠井・松岡, 1988）。しかし、坂入（1995）は、ATによって不安反応が生じる現象を報告している。そして、ATによって生じる不安反応に関するこれまでの研究では、AT練習者の性格特性および、認知、AT練習中の生理的変化について検討が行われてきたが、どのように不安反応が生じるかを解明するには至っていない。

そこで、本研究では、研究1においてAT練習者の性格特性および、認知の観点から、研究2においてAT練習中の生理的変化の観点からATによって生じる不安反応のメカニズムを検討することを目的とした。

〔各研究の概要〕研究1 ATによって不安反応が生じる者の特徴に関する検討および、ATによる状態不安変動モデルの構築から、ATによって生じる不安反応に関して、①特性不安が高い者は、AT習得のキーポイントである受動的注意集中の達成が妨害され、不安反応が生じる、②不安感受性が高い者は、不安反応が生じるという2つのメカニズムが明らかにされた。つまり、性格特性である特性不安と認知である不安感受性がATによって生じる不安反応に影響を及ぼす要因であることが明らかにされた。研究2 ATによって生じる不安反応と生理的変化との関連について検討を行った結果、ATによって不安反応が生じる者は、末梢皮膚温、心電図 R-R 間隔から Lorentz plot によって算出される Cardiac sympathetic index (CSI) といった交感神経機能の中でも、アドレナリン作動性神経系が活性化されることが明らかにされた。つまり、アドレナリン作動性神経系の指標がATによって生じる不安反応に対応する要因であることが明らかにされた。

〔総合考察〕研究1の結果、特性不安が高い者には受動的注意集中の達成を促進させるような指導法が有効であり、不安感受性が高い者には、AT以外のリラクセーション法を適用することの有効性が示唆された。また、研究2の結果、交感神経系の指標の中でもアドレナリン作動性神経系の指標を測定しながらATの指導を行うことによって、不安反応に即座に対応できる可能性が示唆された。

最後に、本研究で得られた諸結果は、ATによって不安反応が生じる者に対する安全かつ有効なATの指導法を提案するうえで有用であると考えられる。

引用文献

坂入洋右（1995）. 自律訓練中に不安反応が生じる患者の特性と不安反応への対応 自律訓練研究, 15, 30-39.

Sakairi, Y. (1995). Personality trait of patients who experienced anxiety response during autogenic training and how to deal with the

responses. *Japanese Journal of Autogenic Therapy*, 15, 30-39.

11. 対乳児発話 (IDS) の変化からみた親になる過程とその個人差

柳渡 彩香

養育者が乳幼児に話しかける際に用いる発話を対乳児発話 (IDS) という。IDS は、国や文化に関係なく普遍的に生じ、その特徴は、対成人発話 (ADS) と比べて、ピッチが高く、抑揚も大きく、特殊な音調を用いることである (Garnica, 1977)。また IDS は ADS よりも、乳児の選好性が高く、話者の意図を乳児に伝えやすいことも知られている (Farnald, 1984)。さらに IDS は、子供の月齢とともにその特徴が明確になる変化を示し、それは親が子供の状態を読み取れるようになる過程を反映するといわれている (Stern, 1983)。しかし、新生児期を対象とした研究は皆無で、IDS がいつから生じ、どのような変化を示すのかは未解明である。また IDS の個人差について示した研究は無く、抑うつ親は IDS の特徴をあまり示されないことも報告されているが、この点についても十分な検討はされていない。

そこで本研究では、①対乳児発話がいつ生じ、どの様に変化するのかを親になる過程として明らかにすること、②個人差を示し、抑うつとの関係を明らかにすることを目的とし、新生児の母親 25 名を対象に、生後 2・4・8・12 週と縦断的に IDS の音響分析と発話機能の分析を行なった。

結果は、母親が乳児の週齢 2 週で既に ADS よりも高いピッチ、拡張された抑揚で語りかけることを示した。つまり、IDS は乳児の誕生間もない時から生じるのだといえる。一方、音調曲線分析の結果、乳児の週齢 2・4 週は、平坦音調を用い、乳児の週齢とともに上昇下降音調を用いるようになることが認められた。それとともに、抑揚も大きくなり IDS の特徴も顕著になった。また発話機能では、2・4 週は注意喚起が多く、乳児の週齢とともに受容応答が増加した。さらに、音調曲線と発話機能の相関をとったところ、平坦音調

と注意喚起、上昇下降音調と受容応答に有意な相関が示された。これらのことから、乳児の週齢とともに、母親の IDS は上昇下降音調が増加、その変化は受容的な語りかけの増加を反映していると言える。したがって上昇下降音調の増加は親らしくなる過程を示唆していると考えられる。次に、乳児の週齢とともに上昇下降音調が増加する変化に個人差があるかを検討した。結果から、全体傾向として乳児の週齢 8 週から増加する上昇下降音調が、乳児の週齢 2 週から出現する母親 (4/15)、12 週になっても増加しない母親 (3/15) が認められた。早期から上昇下降音調が出現した母親は、受容的な発話内容も早期から見られ、IDS でみた親らしさが早くから見られた。一方、12 週になっても上昇下降音調が増加しない母親は、受容的な発話機能が増加せず IDS からみた親らしさの変化も認められなかった。加えて、それらの母親の多くがうつ傾向を示し、このような個人差に産後うつが影響していることが示唆された。

以上、本研究は新生児期の IDS の変化を親になる過程から示し、その個人差も明らかにした。加えて、IDS と抑うつとの関係も検討した。IDS は声であるため、特殊な準備なしに乳幼児健診等、観察する機会が存在する。本研究の成果をもとに、育児不安や抑うつ等の母子関係のつまづきを早期に発見し、母子支援に役立てることが可能といえよう。このことから本研究の成果は発達心理学研究のみでなく母子臨床にも大きな役割を果たすと期待される。

引用文献

Niwano, K. & Sugai, K. (2002). Intonation Counter of Japanese Maternal infant, directed Speech and infant vocal response. *The Japanese Journal of Special Education*, 39, 59-68.